

論文の和文要旨

論文題目

村落と都市の紐帯 —メキシコ、オアハカ州、サン・マルティン村のカルゴ・システム

氏名

禪野 美帆

現在、世界で、都市化やグローバル化の流れのなか、人びとはより激しく移動している。こうした動向において、メキシコのいわゆる「閉鎖的な農民共同体 (closed corporate peasant community)」からも多くの人びとが都市部へと移住している。そのような環境において、どのような村落—都市関係が生まれているのか、本論文では、オアハカ州、ミシュテカ高地に位置するサン・マルティン・ウアメルルパン (San Martín Huamelulpan) という一村落と、同村より首都メキシコ市へと移住した人びとの動的相互関係について民族誌的に詳述し、考察した。サン・マルティンからは、1930年代半ばより都市部への移住が始まり、現在では出生登録人口の40%以上が都市部に居住している。また、出生登録人口の約25%は首都メキシコ市に暮らしている。メキシコ市に暮らす移住者は、サン・マルティンにさまざまなかたちで関わり、大きな影響を与えている。

上のテーマを研究するにあたって、本論文では、ラテンアメリカの農民共同体に広く存在する、行政的・宗教的な自治組織であるカルゴ・システムを中心に論じた。カルゴ・システムは、村落社会の居住者を「閉鎖的」に「共生」させてきた組織・制度であるといわれてきた。現在、多くの移住者を生み、もはや空間的に閉鎖的でない村落において、この組織はどのように変化しているのか。また村落在住者と都市移住者がこの組織にどのような意味を付与しているのか、サン・マルティンの人びとを例に明らかにした。

サン・マルティンより都市への移住が生じる要因として、(1) サン・マルティンでの生活にも現金は不可欠であり、かつ主な生業である伝統的な手法の農業では十分な現金収入が得られないこと、(2) 村への教育やマスコミュニケーションの浸透および近隣の小都市への行き来によって、都市の情報が常にサン・マルティンに入っており、村在住者の都市への心理的距離が近くなっていること、(3) サン・マルティンから都市部へ出る交通機関および交通網が発達していること、(4) 都市に移住したサン・マルティン出身者がすでに多数おり、新たに到着する者がとりあえず滞在できる居候先があるということ、さらに(5) サン・マルティンではすでにミシュテコ語が失われ、全員がスペイン語を使用しており、都市におけるコミュニケーションに関して障害がほとんどないことがあげられる。

サン・マルティンから移住した人びとの多くは、出身村と何らかの関係を有している。その関係としてはたとえば、村に残る家族への送金、祭礼の際の帰郷、また村に土地を有している場合の税の支払いといった個人的な関係があげられる。さらに 1978 年からは、サン・マルティン在住者と都市移住者の関係に組織的・制度的なものが加わった。すなわち、公共施設整備委員会 (*Comité de Obras Materiales*) という、首都への移住者を成員とし、首都在住のサン・マルティン出身者から現金を集め、それを村の公共施設整備のために献金するという組織が創設されたのである。

この新しい組織は、サン・マルティンに従来存在する、「カルゴ [*cargo*、スペイン語で義務的な職務を意味する]」と呼ばれる社会組織と類似したものとなっている。それは、村の行政的および宗教的なさまざまな役職を世帯主が担う義務を負うというもので、行政的役職の場合、1 年もしくは 3 年間の無償奉仕となり、宗教的役職の場合はカトリックの祭礼を遂行するが、そのためにかかる費用も調達しなければならず、大きな経済的負担がかかる。これらのカルゴは成人してから年老いて働けなくなるまで数年ごとに担い続けなければならない。行政的および宗教的カルゴは植民地時代に起源があり、ラテンアメリカの広い地域の村落社会に見られるが、現在にいたるまで変遷してきており、またその形態にも各地で多様性がある。しかしサン・マルティンの人びとにとっては、サン・マルティンのカルゴは所与のものであり、これまで続けてきた、そしてこれからも続けるべき習慣である。

サン・マルティンのカルゴは上記の 2 種類に加えて、村が近代化するにつれて、新たな機関が創設されるたびに増えている。たとえば、小学校や中学校の PTA、考古遺跡博物館の役員、衛星公衆電話のオペレーターなど、サン・マルティンではすべて無償奉仕の役職であり、「カルゴ」と呼ばれる。

サン・マルティンでは、カルゴへの就任は村長より指名される。立候補があった場合でも、最終的には村長から任命される。そのような大きな力をもった村長は、村在住の世帯主が集会を開き、推薦および挙手によって選出される。選ばれた者は、たとえ 3 年間の無償奉仕が不都合であっても拒むことは許されない。すなわち、村長は、「村人の総意」によって「村長というカルゴ」を強制的に担わされた者である。したがって、村長によるカルゴへの指名および任命は「村の決定」としての権威をもつのであり、同時に村長からの任命を拒むことは「村の決定」を否定することを意味する。

公共施設整備委員会は、都市にありながら、このようなカルゴの諸特徴を備えている。それは村への無償奉仕であり、成員は村長から任命される。すなわちこの組織は、村主導型の、「都市に拡がる新たなカルゴ」といえるのである。

首都移住者は、こうして新たな組織を通して村に貢献するだけでなく、1991 年からは重要な祭礼の遂行責任者 [*マヨルドモ mayordomo* という] の役も頻繁に務めている。

すなわち移住者は、新たな組織だけでなく、従来村に存在する組織の重要な地位まで担うようになったのである。

ではなぜサン・マルティン在住者のみならず、都市移住者までもがカルゴを担うのか。それは、サン・マルティンに、犠牲を払って「村に奉仕しなければならない (*hay que servir para el pueblo*)」というモラルが存在するからである。それは具体的には、「村長が指名したときに、たとえ都合が悪くても、犠牲を払って村に奉仕するのが正しい村人である」というモラルである。

村に暮らしている限り、カルゴから逃れることは不可能である。それが嫌ならば村を出ていくしかない。実際そうする者もいる。すなわち、先にあげた移住を促す5つの要因以外に、「村の役職を担うのが苦痛である」というのもサン・マルティンからの移住を生む要因なのである。しかし村を離れ、そのままカルゴから逃れている者は、サン・マルティンを時に訪ねることや、死後、村で埋葬されることは困難となる。いいかえれば、都市民としてのみ生きていく者はカルゴを逃れていることができる。

一方で、都市に出たものでも、「村人」であることが必要ならば、すなわち、サン・マルティン在住者や都市に暮らす村出身者から、「村人」としての成員権を認められたければ、村のために奉仕するという「村人らしいこと」をしなければならない。それが、公共施設整備委員会や祭礼の遂行といった行為なのである。しかし貢献の方法は、現金を提供するという都市でできるやり方になっている。

このように、カルゴとは、サン・マルティンの人びとにとって、その負担によって村から人を追い出してしまう要因になっており、同時に、都市においても「村人」でいたい出身者から現金を村に提供させ、さらに都市移住者に村人としての規範をも与える、村と都市をつなぐ紐帯ともなっているのである。

本論文では最後に、サン・マルティンの人びとのカルゴとの関わりを、ピエール・ブルデューの用語を借りて、文化資本、経済資本、象徴資本という概念から考察した。サン・マルティンで生まれた者は、「村に犠牲を払って奉仕すべきである」、と疑いなく思うという「文化資本」を有しているが、都市に移住して得た「経済資本」をカルゴを通して村に渡し、貢献する者だけが、村人としての威信という「象徴資本」を得ることができる。いいかえれば、「経済資本」を渡したくない者や、渡せるほど有していない都市移住者は、村人としての成員権を持つことができないといえる。

現在、サン・マルティンの人びとの居住地域はもはや閉じていない。しかし成員権は閉じている。サン・マルティンの出身者がサン・マルティンの者、と認めるのは、サン・マルティン出身か、サン・マルティン出身者と結婚した者で、かつ、犠牲を払ってでも村のために奉仕する者である。そのような意味では非常に閉じているのである。

サン・マルティンの人びとは都市社会や世界経済に影響を受けても、カルゴを創造的

に変化させていくかたちで、極めて葛藤少なく適応している。これをカルゴの衰退であるとは筆者は見ない。なぜなら、カルゴの変化を通して、サン・マルティンには都市から現金が入るようになり、またますます祭礼は派手になり、都市移住者も切れずにつながっているのである。メキシコ各地の農村で、州政府からの予算をめぐる有力者間の暴力的犯罪行為や殺し合いがふつうの出来事のように起こるなか、サン・マルティンの人びとが、「自らを犠牲にして村のために奉仕すべきである」というモラルが強く共有されている事実と、それを資本として利用した状況への適応のしかたは、驚くべき平和な方法だといえる。

サン・マルティンの象徴資本はサン・マルティン出身者の頭のなかにしかない。現在のところ、都市移住者の多くも、村に犠牲を払って奉仕することによって象徴資本を得ることを必要としている。そのような状態がつづく限り、サン・マルティンが今後どのような都市化や世界経済の波にのまれても、サン・マルティンの者としてのアイデンティティは失われず、たくみにカルゴを変化させながら、村は柔軟に状況に適応していくのではないだろうか。